

現代親子関係の特徴と課題

Characteristic and subject of parent-child relation in the present day

—不登校ケースにおける「愛情」と「権威」—
"Nurturance" and "discipline" in the student who stopped going to school

植 田 智 也

はじめに

小中学校のカウンセリングに持ち込まれるケースの3分の1は、「不登校」に関する事柄である。小中学生に向けた子育てや教育は、子どもの「自律性」および「相互性」の伸長を最重要の課題とするが、「不登校」の状態は、そのための環境としての他者あるいは集団からの隔絶を意味している。そして、この要因を知ろうとすれば、子どもが「不登校」の状態に至るまでの経過は言うまでもなく、個人とそれを取り巻く環境との関係性、つまり個人を中心とした社会関係全般の考察が不可欠だといえる。そこで、本稿では、様々な要因のうちの一つと考えられる父母子関係、そのなかでも子どもに対する父母の「権威」の与え方、あるいはそれと「愛情」との関係に着目し、子どもに「不登校」を引き起こさせる親の態度を中心とした考察をおこないたい。

1. 「自律性」および「相互性」について

山根は、個人主義社会の「社会人」としての能力を、「自律性」、「相互性」という二つの言葉で説明している。すなわち、前者は、「物事を自ら判断し、自ら意志決定して、自ら実行できること」¹⁾であり、後者は、「他者を受容し、他者と協力できること」²⁾である。つまり、「自律性」とは、人間の基本的欲求といわれる成就完成の欲求、独立の欲求³⁾を充足するための基本的な能力であり、「相互性」は他者充実の欲求⁴⁾を満たすための能力だといえる。

そして、同者はそれらの関係について「個人の真の自律性は対人関係における相互性に基礎づけられ、またその逆も真であるということが出来る」⁵⁾と述べている。穿った解釈かもしれないが、個人主義社会が望む個人の生き方とは、“自分のために生きることが、同時に他者や社会への貢献となる”それであることになるだろう。つまり、自己の「充実」としての行為や行動が他者や社会の「充実」を導くことであり、この「充実」の影響として、自己はさらなる「充実」に至る、という自他の相互作用の端緒となる個人の生活態度—筆者は、これを人間生活の本質に根差した生活態度と考える—を、山根は「自律性」および「相互性」という二つの能力をもってとらえ直しているようだ。

思春期にある中学生が有するそれら二つの能力は、一般的に大人のそれらを超えるものではないと考えられる。彼・彼女らは、おそらく、対人関係のなかで、幼少の頃から親のしつけによって埋

め込まれた価値観を処世の道具として利用しながら、齟齬を経験し、傷つき、それを否定したり、それに修正を加えるという仕方、自らの価値意識の再構築をはかるという所謂“疾風怒濤の時期”を正面から通過することが望まれるはずだ。そのなかで、社会人として相応しい「自律性」も「相互性」も育って行くに違いない。しかし、不登校の子どもたちではそれが難しそうにみえる。これは、彼・彼女らは、理由はさておき、不特定の他者、少なくとも自分と同年代の他者との相互作用に価値を見いだせないか、それに困難を感じていることを示している。山根は、「親のもつ権威と愛情は、子どもの自律性と相互性を養ううえに大きな役割を演ずるものである。(中略)したがって、家族が育児の機関であるならば、それは自律性と相互性をもった人格を育てる機関であるということが出来る」⁶⁾と述べている。そうすると、他者との相互作用に価値を見いだせないでいたり、それに困難を感じている理由も、この「親のもつ権威と愛情」と深く関係しているとして間違いないだろう。

2. 「愛情」および「権威」が育むもの

「親のもつ権威と愛情」とは、一体いかなるものであろうか。山根は、「乳児は母親の胸に抱かれ、柔らかい乳房を吸うことによって、エロチックな快感を充足する。母親もそうである。人の愛の能力はこのエロチックな快感の充足によって芽生え、発達する」。そして、「親が身体接触を通じて子どもにエロチックな充足を与えることをナーチュランス (nurturance) というが、これが十分に与えられないと、子どもの人格発達をゆがめることになる。」⁷⁾としている。「エロチックな快感」を充足する親の行為とは、授乳、抱擁、排泄の世話など乳児への身体接触を伴う日常的反復的な子どもの欲求への無条件の対応と考えられている。斎藤も表現は異なるものの、「母親は、文字どおり乳児に惚れ込んでおり、(中略) 乳児の方は、自分に惚れ込んだ母親のまなざしと物腰を頼りに、『祝福される自己』のイメージを作り上げてゆく」が、「これがうまくいかないと、乳児は自己をとらえ損なうことになってしま」う、と母親の乳児に対する無条件の対応を重視している⁸⁾。そして、この親の対応がうまく行なわれないと、子どもが長じても自己愛に固着する人格をもってしまうことを示している点は両者に共通している。また、エリクソン (Erikson, E.H.) は、「基本的信頼 (basic trust)」という言葉を用いる。これは人間の社会心理的発達段階の一区切りである生後一歳前後までの時期における養育の課題と考えてよいだろう。この時期に子どもは、母親の一方的な保護環境の中で、母親の自分に対する態度を通して社会に対する態度を習得するが、この養育が適正であるか否かが、子どものその後の社会に対する態度、他者に対する態度を左右するという⁹⁾。つまり、他者を信頼できる者、敷衍して社会を信頼できる者とは、まずこの時期に、山根や斎藤がいうような親の無条件の愛情により、自己愛が十分に満たされた者と考えられる。三者が論じているのは、自己尊重の起源と言ってよいだろう。自己尊重には、自己愛の充足—親のかかわりとしては、無二の愛情—が欠かせないということである。

しかし、山根は、この「親子の性的な結びつき」つまり親の無条件の愛情からは、潜在期 (latent

period) に入る頃までには解放されなければならないとする¹⁰⁾。さらに、子どもは、自己愛が育ち、親の存在に気づくようになれば、「はじめて外的対象である親を愛するようになる」が、この愛は「インセスト的であるがゆえに断念しなければならない」としている¹¹⁾。同者は、「子どもは同性の親に同一化 (identify) することによって、親とのインセスト葛藤を克服するとともに、親のもつ価値規範を内面化して、自らの心の中に内的権威 (inner authority) を確立する」¹²⁾というのである。すなわち、子どもの異性親への性愛は、子どもにとっては太刀打ちできないライバルとしての同性親によって断念させられる。しかし、子どもはそこにとどまるのではなく、異性親との特別な結びつきを期待しつつ同性親に同一化する。子どもは、同性親を理想化し、親のもつ価値規範の内面化に赴く。これは、インセスト葛藤の克服の方途ともなっている、と理解できる。続けて同者は、「この内的権威は子どもの自律的行為を可能にし、そして内面化された価値規範は子どもの道徳的行為を可能にする」と述べる¹³⁾。そして、「内的権威」の形成を親の側からとらえた場合を、「しつけ (discipline)」と呼んでいる¹⁴⁾。これは、「親は同一化の対象として、子どもにとって『権威ある人物』でなければならない。親が権威をもって子どもに接し、子どもの行動を条件づけ、方向づけ」をするということである¹⁵⁾。「内的権威」とは、自己愛とともに、「自律性」および「相互性」を支える要素であるようだが、「ナーチュランスとともにディシプリンを行使することは、親として子どもに対する責任」であるとし、「親に権威がなくてしつけが十分になされないと、子どもの人格発達はやがめられる。例えば、子どもは自己中心的な幼児段階に固着し、長じても社会生活に適応できないことになる」としている¹⁶⁾。たぶん、エディプス期以降の子どもの場合、親のかかわりが愛情一辺倒であっては、甘やかしくなってしまう。「しつけ」は自己愛に裏づけられたエゴ (ego) を調整しつつ他者と共存できる自己を育む働きをもつのだろう。斎藤も、「叱ることのなかに、子供は自分を真剣に愛する親の心を感じ、自分を大切にすることを学習する」と言っている¹⁷⁾。エゴの調整は、親の権威的なかかわりの初期には、子どもに忍耐や我慢を要求することになるだろう。しかし、子どもの自己愛が十分に満たされているならば、自己の非を認め誤りを正してもなお自己卑下に陥ることはない。

子どもは、親の愛情に裏付けられたその権威を受け取り、当面はそれを平生の手本として参照しつつ、自分で考え、自分で決め、自分で行動しようとするわけである。親の権威とは、子どもが将来身につけるべき本来の「自律性」、「相互性」にとっての基準としての役割を果たすのだろう。

ここで、子どもが親に同一化することによって得られた「内的権威」の役割をすこし具体的に述べると、ひとつは当面の自己愛の舵取り、つまりやって良いこととそうでないことの分別であり、もうひとつは、将来個人が獲得すべき「自律性」と「相互性」にとっての手本あるいは基準、つまり他者や環境との関係性に関する興味や関心の芽を育むための価値意識だと考えてよいだろうか。このなかには、生き抜く強さを育てたり、他者にとっての最善の自己を知らしめる働きが含まれる必要がある。

以上を否定的な側面から要約してみる。すると、「内的権威」をとまなわぬ自己愛—親の「無条件の愛情」により育まれたもの—は、究極的には他罰、他者の否定をもたらすことになるだろう。

自己尊重の原点は、自己愛の獲得にあるが、自己愛が十分に満たされた場合でも「内的権威」が不足すれば、自己尊重は単なる自己中心的態度となってしまうことが推測できるからである。また、自己愛をとまわらない「ナーチュランスの経験を欠いた」 「内的権威」は、究極的には自罰、自己否定をもたらすと考えられる。これらのことから、乳児期から学童期にかけての「ナーチュランス」と「ディシプリン」の偏りや欠落、それらの質、与えられる時期が、「自律性」と「相互性」の発達、すなわち「自立」の阻害をもたらすという推測は容易になされるであろう。

3. 「不登校」状態の子どもの自立度 ～「自律性」および「相互性」の低さ～

「不登校」の生徒たちの「自律性」や「相互性」の指標である自己概念、他者との関係、価値観とは、如何なるものであるのか。筆者がかかわりをもった者たちの生活態度からそれらを探ってみたい。

なお、以下に挙げるケースは、筆者が親や教職員からの教育相談として、過去2年の間に受け付け関わってきたものである。そこに中心人物として登場する子どもたちは地方都市の公立学校に通っている子どもたちである。ここで断っておくが、それぞれのケースの内容は、実在の人物や家族のプライバシーを保護するため、本質を失わない程度に手を加えてある。

(ケースA…その中心となる子どもはa)

aは、中学1年の男子である。集団から注目されることに抵抗を感じており、教室に入ることができない。小学校の4年のとき、クラスの男子生徒たちから、親しい女子生徒に筆箱をプレゼントされたことを冷やかされた。そのころから、登校を渋る日が増えだし、現在は全く登校できていない。おとなとの接触や会話は避けないが、不登校の理由やそれを続けることのデメリットについて問うても、「知らない」「わからない」としか答えない。

自宅では、テレビを見たり、お気に入りの漫画雑誌を楽しんだりして過ごしている。朝起きや更衣の習慣はできていない。現在の状態についての焦りは多少あるようだが、深刻さは感じられず、それを換えようとする自発的な動きはほとんど見られない。何をどうすればよいのかを考える糸口が見えないようでもある。

母親が遠方に住む親類の看護で数日間家を空けたとき、父親や祖父が馴れない様子で家事をしていると、自分からそれを手伝っていたという。

(ケースB…その中心となる子どもはb)

bは、中学1年の女子である。小学3年生の時、父親が交通事故で他界。以後しばらくして、友人との口論が切っ掛けで不登校が始まっている。母親が留守中は、家中のカーテンを閉め、誰もいないように装い近所の顔見知りの人が尋ねてきても、玄関を空けようとしない。母親以外の人との接触を避けているようであった。筆者が呼び止めようとしても、何を聞かれるかと不安を感じてか、母親の近辺を早足で歩き回り、目を合わせようとしなかった。

それでも、母親が父親との死別の痛手から立ち直り始めると、bにも変化が現れている。今も中学

への登校はできないが、知り合いと顔を合わせる事のない学習塾に通うようになった。母親は、自分の年収を聞かされ、経済的自立を意識し始めたのではないかと考えている。

(ケースC…その中心となる子どもはc)

中学2年の女子生徒であるcは、「人の悪口を友人に喋ったら、そのことをクラスの他の人に“ばらされた”ので恥ずかしい」という理由で不登校を始めた。以前から、家庭と学校の区別なく、一見活発そうに振る舞うが、周囲の反応が冷ややかであったり、支持的でないと感じると元気をなくし、沈み込んでしまう。

親が中学卒業後の進路を心配して尋ねると、高校へは進学したいという。しかし、その理由は、「みんなが進学するし、高校を卒業しないとバイトでも雇ってもらえないだろう。ファミレスやコンビニでバイトして、好きなものを買いたいから…」と答えたという。中学2年生に確たる志を期待するのは無理かもしれない。しかし、不確実なことではあっても、自己実現や社会貢献などが多少は意識に上ってもよいはずである。自己中心的な思考から抜け出せず、自らの将来や人生に対して、非常に貧弱な展望しかもてないでいるように感じる。

(ケースD…その中心となる子どもはd)

dは、中学3年生の男子生徒である。一学期、寝食を忘れたように詰め将棋に熱中し、学校を休みがちとなる。生活が昼夜逆転することもあり、とくに休み明けの日に登校できないことが多い。母親が、学校で何か嫌なことでもあったのか、と尋ねても「そんなことじゃない」としか答えない。お説教をすると、足や手がとんでくることがあった。そして、将棋に飽きるとドラムやキーボード、それに飽きるとパソコンゲームに熱中する。とうとうまったく登校しなくなり、夏休みも過ぎていく。この間の生活を母親は、「自由気まま」であり、「中学生の本分など、どこ吹く風」であったと表現する。

担任からの登校の呼びかけや友人たちの誘いが効を奏したのか、秋風が吹く頃になると突然登校を始めた。母親は、「やりたいことをやりつくして、家にいても面白くないから」登校を始めたのでは、とその理由を述べている。その後も、何かに興ざると、学校は二の次になってしまうことがある。

(ケースE…その中心となる子どもはe)

eは、中学二年生の女子生徒である。バレー部のセッターというレギュラーポジションを与えられていたが、本人よりも上手くなった下級生とそれを交代させられた。その頃から、同部の友人との関係がぎくしゃくし始める。親友と思っていた友人に自分の気持ちを打ち明けても軽い返事しかなく、期待に十分応えてくれない、「もっと自分のことをわかってくれていると信じていたのに、そうではなかった」、「もっと深く物事を考える人だと思っていたのがっかりした」という自らの心情を親に語っている。そして、それを理由に登校を渋るようになり、現在学校へ行くことは殆ど無い。そこにあるのは、青春特有の、親友を求めても思い通りにならない場合の心性のようにもみえるのだが。

その不登校によって、学校の勉強について行けなくなったことをeは感じるようになっていた。こ

のため、親の勧めもあり進学塾の特別クラス（不登校の分の授業を補うクラス）に参加する。自尊心によるのか、皆と同じクラスで勉強できないことへの不満を訴える。しかし、以前よりも自宅学習に力を入れるわけでもなく、また塾で講師に質問をするのでもなく、その遅れを取り戻すための積極性を示さない。

（ケースF…その中心となる子どもはf）

fは、中学2年生の男子生徒である。「疲れた」という理由で、欠席がちとなる。それまでは、学業成績が良く、リーダーシップも取れる生徒であった。また、友人や同じ部活の仲間からの信頼も厚く、周囲の大人たちからみると、紛れもなく「優等生」として映っている。fも、周囲の期待を感じているかのように、「(学区で) 一番の高校を卒業して、科学者になりたい」と親に語っていた。

現在、自宅で過ごしている間はテレビに見入り、宿題以外の勉強は一切しない、という。それまでは旺盛だった学習意欲が影を潜めている。その理由については、父母や担任にも話していない。勉強の遅れを心配する両親が勉強のことを口にする、「黙っていてほしい」という態度で反発し、取り付く島がない。カウンセリングを受けるように進めても、気が向かないようである。

4. 父母子関係と「不登校」状態 ～「愛情」と「権威」の内容～

3. でみた「不登校」の子どもたちの自己概念や価値観、また他者との関係などは、どのような生育環境のなかで形作られたのであろうか。本節では、それぞれのケースにおける父母子関係を、筆者が知り得た生育に関する情報を基に考察する。さらに、その考察（問題状況が発生した要因についてのアセスメント）に基づく面接後の関係改善の状況についても書き添えておきたい。

（ケースA）

aは、最初、成長と発達には付き物と考えられる同年代の反応（異性との関係に対する冷やかしかからかい）にストレスを感じ、それに耐えられなかったために欠席をしたようだ。その同年代の反応が羨望の表現であり、aは同性の者たちのヒーローとして扱われていたということに気づいていれば、不登校に転じることはなかったのかもしれない。上に述べた彼の幼さや精神面の弱さを感じさせるその生活態度を併せて内的権威の発達について評価をすれば、それが未発達であることを認めざるを得ない。

そこで気になったのは、父母による権威の与え方である。数度の育児相談で知り得たのは、aの母親は、日常の細事に関しては、忠実に指示を出すのだが、処世についてのしつけや他者の心情を理解させるための情報の提供をおこなって来なかったということである。また、父親は、子どものしつけは母親に任せきりで、深く関わるということがないということだった。しかし、数日間の母親不在中に祖父や父を手伝ったという事実は、近しい男性の本人に対する影響力の強さを示しているだろう。そこで、筆者は、aの社会人モデル、男性モデルとしての振る舞いを意識してほしい、と父親に対し要求をしてみた。現在、父親は、aの生活習慣の改善に関して、少しずつではあるが、aに対する指導的態度を示せるようになってきている。

(ケースB)

「自分は、幼少の子どもに十分な関心が向かなかつた。逆に父親は、子煩悩と言えるほどのかかわりをしていたが、それは私の分を意識的にカバーしていたのかもしれない」。そのように、母は過去を述懐する。父親の死後、母親は、はじめて常勤の職を得て、親子2人の生活維持に奔走する。「夫との死別のショックも大きかったが、娘への関心より、明日の生活のことばかり考えていた」という。母親は、bの不安定な登校が、明らかな不登校のかたちを表しても、その理由を十分考えずに、「家の中でごろごろしている」我が子に苛立ち、叱ってばかりいたという。また、bが自分に話しかけてきても、「まともに相手をしてやることがなかった」とも言っている。

その後、夫との死別のショックから立ち直るにつれて、また金銭収入が安定してきたことで、「他のことにも気が配れるようになった」という母親は、自らの交友や気の合う仲間との付き合いが徐々に回復してくる。最近では、bと向き合うときも「余裕が出てきた」ようで、「目を見て話を聞いてやれるようになった」と語っている。bには、そのような母親の変化と軌を一にするように、徐々に家族以外の人たちとのかかわりや外出の機会が増えてきている。それは、自己の将来に対する関心、そこからの勉学への意欲に動機づけられているようだ。

(ケースC)

父親は、cが幼いころから、育児を母親に任せきりで子どもと深く関わろうとしない。自分にとって都合の悪いcの行動・行為や物言いに対して感情的に叱ることはある。しかし、父親としてcを躾けるために、意識的に彼女とかかわることはまったくない。その振る舞いは、自らが家庭の中の不文律と言いたげな態度だが、そこに父親の権威が込められてはおらず、常にcの反発を買うことになる。そのときの父親には娘の態度に対する畏縮がみられるという。

また、母親は、夫に対し、従順なタイプの妻である。娘の不登校で相談に訪れるのはこの母親であるが、父親の態度を改めることの重要性について助言を受けても、それを夫に伝えているようではない。良妻賢母を自覚し、自身の自立つまり個人としての充実、自分だけの生き方を家庭の外に求めることなど思いも寄らない、というような旧態依然とした意識を感じさせる。筆者との間でもたれる教育相談においても、気づきや驚き、あるいは困惑といった感情の変化を示す身体表現もあまりなく、その目的を十分には理解していない様子である。自分の子どもが他の子どもと違っていることは気になっているようではあるのだが、自分がcにとって最も身近な成人女性であり、その人生にとって影響力のあるモデルであるという自覚は、あまり感じられない。

この夫婦は、夫唱婦随とでも呼べるような従来の性役割に則った夫婦関係を模範とした子育てを考えていたようである。今後この父親は、現代の父親が有すべき謂わば“個人主義的子育て”に相応しい権威を発揮することを、またそのためには従来の性役割に基づく夫婦関係を見直すことを期待したい。一方母親には、これからは個人としての自らの生き方を求めているいただきたい。

(ケースD)

若くして大企業の幹部であった父親は、dが満2歳の誕生日を迎える前に他界している。父の実家は名家であり、その長男であった父は、将来を嘱望された人でもあった。父の死後、父の両親

がdを「家」の跡取りとして引き取りたいと申し出たが、母親は、自分で育てると言い張り、それを断っている。dに対する母親の期待は大きく、一流大学を卒業させ、社会的地位の高い職業に就かせたいと考え、現在まで学業重視のしつけを続けてきたようである。それはまた、dが寄る辺としての存在であるということだけでなく、父親の実家を意識した謂わば「意地」によるところが大きいと感じる。

しかし、一方では、母は夜間に自分が外出するときなどは、dが独りでは防犯と食事が「心配」という理由で、近くの親しい知人に彼を預けることにしており、子どもの年齢に不相応の気遣いがみられる。そして、母親のdに対する期待は、職業にとどまらず、結婚や自分の老後にまで及んでいるようだ。また、母親は、dが学校からの連絡や翌日必携の教材を失念したりすると、学校に問い合わせたり、何かを教師に頼むなど、彼に代わってその手拔かりを補おうとする。当然本人がおこなうべき事柄を、教え諭すことで本人自らがその行いに責任をとれるようにし向けようとしめない。

息子との心理的な分離に不安を感じていても当然と考えられる母親の境遇ではあるが、この母親にもぜひ個人としての自分の生き方を探して欲しい。筆者は、上に述べた母子関係上の特性を指摘し、その要因としての母親自身の心情を明確化することを目的とした面接を重ねた結果、現在この母親は、以前と比べ、子どもの行為の「補い」や子どもの年齢に不相応な気遣いは徐々に減少してきたように見える。

(ケースE)

親は、自分の気持ちをはっきりと友人に伝えるように助言をし、娘(e)もそれを試みるが、友人から返ってきた言葉は娘の期待とはずれ、共感してくれたとは到底考えられないものであった。しかし、娘はそれを母親に伝えても芳しい答が返ってこない。母親は娘に何を言ってやればよいのか分からないという。そして、返答に窮するだけで、娘の困惑や深刻な思いをまず受けとめようとしていない。父母は仕事で忙しく、娘とゆっくり話す時間が無いというが、無いのは時間ではなく親としての自信であるかもしれない。

eには3歳下の妹がいるが、こちらは、姉と違い細事に拘らず、何事にも活発な性格だという。父母は、姉と妹へのかかわり方について、とくに分け隔てをした覚えはない、姉にその役割を強要したこともないと言っている。姉妹は、2年前に他界した祖母と生まれたときから同居しており、父母が仕事の間は、この祖母の世話を受けていたという。そこに長幼の序列を意識したかかわりがあった可能性は否定できないだろう。けれども、たとえそれがあつたとしても、短くても毎日父母と濃密な時間を過ごすことで、子どもは心の渇きを感じないはずである。母親のeに対する現在の態度は、それができていなかったことを示してはいないだろうか。また、eの勉学に対する姿勢も、同じ理由による本人のあきらめ、つまり自信の不足を表しているのではないだろうか。

筆者は、数度の面接の際、この母親には、“親子の濃密な時間”の大切さを強調した。現在母親は、それまでの娘への表面的な対応をあらため始めている。そして、それが“忙しき”を過度に意識した結果生じていたことにも気づき始めている。

(ケースF)

父母の夫婦関係、fと父母との直接的な関係は良好であるようにみえる。子どもに対する父母の期待がないわけではない。しかし、それは本人の成長や学業成績に応じてふくらんだものであり、父母の側から押し付けているものではない、と言っている。また、高校受験や将来の進路に関して両親は、f本人の希望に叶ったものであればよい、という構えにあり、本人に全幅の信頼を寄せている。育児相談も“それであるのに何故”という思いからの両親の来談であった。

気になるのは、4歳上の兄の存在である。この兄は、弟と違い、勉強もスポーツも苦手であり、同年代との交友も活発な方ではなく、父母からみると心配な子どもであるという。母親は、兄に対する気苦労からか寝付くことがしばしばあり、そのたびにfは、幼い頃から不安そうな面持ちで母を気遣っていたらしい。持ち前の能力や性格は、「自律性」の発揮というより、父母の期待への呼応として使われていたのかもしれない。もしそうなら、本来の「自分らしさ」と親の期待に応える「よい子」としての振る舞いとの間に齟齬が生じ、違和感や疲れを感じているかもしれない。

筆者がおこなったアセスメントの内容を伝えることで、父母はfの現在の状態が、ノーマルな成長過程を示していることを理解したようであった。ふたりは、勉強や登校に関して、fに刺激を与えることが無くなった。

5. 不登校ケースにおける父母子関係の成り立ち

前節では、不登校ケースにおける「愛情」および「権威」の特徴について考察したが、ここではそれらの成り立ちを考えてみたい。

ケースAについては、権威(父性)全般の不足は、明らかだといえるだろう。なぜ、父親は息子のしつけを熱心におこなおうとしないのか。また、母親は、そのような父親を支えることで、しつけに向かわせようとするのか。両親とも、自分たちの受けてきた子育てを規範とし、その他の方法を思いつかないのだろうか。おそらく、両親が養育を受けた環境(大家族構成(きょうだいや祖父母の存在など)、住まいの形態(アパートか持ち家かなど)、近隣との付き合い方など)と現在のaのそれとはどこかが違っているかもしれない。また、子育てを受ける時期にも、両者には四半世紀以上の開きがある。その間の私事化の進行は、地域社会における家族や個人の孤立化をもたらしたと考える。社会に流布する価値観への迎合・適応も目につくが、地域社会内、集団内の交際も低調・疎遠である。親は子育てに関する情報を同じ立場にある者たちから入手したいと思っても、そのための機会が見あたらないというのが、現在の状況だといえる。育児相談の相談員やスクールカウンセラーによる「権威の与え方」の方向付けだけでは、親が具体的な所作や言辞をイメージすることは難しいだろう。

父親の育児不熱心の理由としてもう一つ気になるのは、父親自身が自己の人生にあきらめを感じている場合である。競争社会と呼ばれる状況のなかで、われわれおとなは他者との比較を基に自分を評価する癖がついている。もし、親が劣等感を感じているとすれば、子育てにもあきらめが伴う

かもしれない。

父親は感情的に娘を叱責するが、「自律性」や「相互性」を促す権威は示せていない、そして、母親は従来の女性役割しか示せず、現代に相応しいしつけができない、というケースCの状況は、権威の不足と不適正を示している。この状況の成り立ちも、ケースAの場合と大略同じと考えられる。

権威の不足と不適正ということでは、ケースDにも当てはまることである。母親は、「家」制度的価値観に対し反発するように自らの意地によって偏ったしつけをおこなってきたこと、加えて子どもにとってのモデルとなる男性の不在がその内容である。しかし、それだけでなく、息子に老後の世話を期待している点が象徴しているように、母親と息子には共依存関係が見て取れる。本来夫との間で満たされるべきところの情緒的な支え合いを、息子との間で叶えようとしているように見える。母親の「心のなかの他者」¹⁸⁾の範囲の狭さも権威の不足と不適正の要因と考えられる。

ケースBの場合、根源的な愛情不足があるとすれば、それは子どもの成長にとっての桎梏となるだろう。子どもがごく幼少の頃、母親のそれへの成り込みに基づくナーチュランスで満たされた自己愛によって得られる全能感が基本的信頼感や自己尊重の根源と考えられる¹⁹⁾が、もしそれが欠けているとすれば、幼児期に達した子どもに対する父親のかかわりは、それがいかに濃密であったとしても、乳児期に与えられるべきナーチュランスの代償とはなり難いのではないか。つまり、それは子どもの内面に、環境に対する基本的な信頼感を育むものとはならないのかもしれない。また、自己愛が満たされていない子どもにとって、親のしつけは、内在化された権威とはならないだろう。

生前父親は、娘に対し、母親の代わりを務めようとするだけでなく、権威的な立場でかかわることがあったというが、その愛情は当座凌ぎではあっても娘の内面に刻印されることはなく、その権威も娘に内在化されないことが推測できる。

ケースEでは、子どもは、自分に感心を向けてくれる他者を常に求めており、加えて現実検討に要する能力が身に付いていない。これらには、愛情の不足および権威の不足を疑わざるを得ない。母親は何かが多忙であったり、腐心する事柄を抱えており、娘への共感を忘れがちであったことが、その権威の内在化や自信の涵養に悪影響をもたらしたのかもしれない。さらに、父親の、母親の支えとしての態度、子どもの育児に関する態度にも問題はなかったであろうか。父親の価値観とその成り立ちを確認する必要がある。

ケースFは、親によって直接注がれる愛情と権威に問題は感じられない。親の期待に応えられない兄をみて、その期待を自分へと移し替えていたようだ。そして、それを自己の夢や希望と思い込んでここまで来たが、実は違っていることに気づき、迷いや混乱、親に対する反発などが生じたのだろう。不登校や勉強のサボタージュは、一過性の苦悩の現れと考えておきたい。しかしながら、子どもは、きょうだいに注がれる親の権威にも反応するとすれば、一人ひとりの子どもに応じた権威を、そのきょうだいへの影響にも配慮しながら与えることの難しさを教えている事例である。

6. 「不登校」ケースに見出された親子関係の課題

以上6つの「不登校」ケースで論じた「権威」の特徴とその成り立ちを基に、現代の親子関係における課題を述べ、本稿の締めくくりとしたい。

まず、権威の与え方についてだが、父母自身の生育環境、家族のおかれた現在の環境からの影響を受けやすいようだ。親はしつけの目的を理解し、時代の趨勢を見極めたうえで、それに必要な情報が不足している場合は、これを補うための方途を探ることが望まれる。また多様な価値観のなかから「社会人」を育むに相応しいものを取捨選択して採用することが重要である。それらの実行には、親の勇気と知恵が試されるだろう。その点で、「ただ可愛いから愛する」という母性の特徴、時代を超えた普遍性が重要と考えられるナーチュランスとは性質を異にしている、とあってよいだろう。

また、ナーチュランス（愛情）は、きょうだい間の分け隔てがあってはならないこと、いわば膝の上の平等が原理と考えられる。しかし、これとは異なり、権威の与え方としては、個々の子どもに応じたものを、そのきょうだいへの影響にも配慮しながら与えることが重要である。

さらに、権威には、親の我が子に対する見方—我が子観—が影響する。「家」制度の価値観の影響を被る親の場合、自らの「心のなかの他者」を親族に限定しがちであることから、偏った権威を子どもに与えがちとなっているようだ。我が子を「社会人」に育てるには、親には子離れが必要である。

最後に、「愛情」との関係である。子どもにとってその内的権威を育む土壌は、十分な自己愛である。子どもが幼少である頃の親の「愛情」—とくに乳児期のナーチュランス—は十分に与えられねばならない。それが不十分である場合、親の「権威」はプラスの影響力をもちにくい、といえるだろう。子どもは“ただ可愛いから愛する”という心根をもてないでいる親では、それを自覚し、自らの成長をはかる必要がある。子どもを私物として観る親、本稿で挙げた6つのケースには見あたらなかったが経済合理性の価値観に過剰適応する親などのなかにもこれに該当する者がいるだろう。

ここに挙げた個人と家族の課題は、それらと社会制度、社会関係の客体との関係上のそれとして捉え直されることが重要である。

おわりに

「不登校」は、現代の親子関係の歪みから引き起こされた一つの現象であり、親子関係の歪みは社会制度の欠陥や社会関係の歪みに起因する、と考えられる。今後は、親が与えるべき「愛情」と「権威」の性質の成り立ちを社会関係の主体である親とその客体との関係の中で探ることが必要と考える。また、不登校児童本人と学校あるいは学校集団との関係を視点とした考察もおこなう必要がある。

注

- 1) 山根常男『家族と結婚』家政教育社 1992年 P.P.375～376。
- 2) 前掲1)
- 3) 岡村重夫著『社会福祉原論』全国社会福祉協議会 1984年P.73。岡村は、「人間の基本的欲求」(basic human needs)を「生理的欲求」(physiological needs)と「心理的欲求」(psychological or personality needs)とに分ける。そして、後者については、一般的に承認されているものとして、①家族、その他の人から愛されたいという愛情 (affection) の欲求、②友人仲間、家族その他団体の一員としてこれに所属したり、自分より有力な存在の一部でありたいという所属 (belonging) の欲求、③社会的に価値あることを成就、完成したいという成就完成 (achievement) の欲求、④他人の干渉を受けずに自主的に行動し、物事を自発的に選択したいという独立 (independence) の欲求、⑤自分の行動が他人から感謝されたり、ほめられたりして、自分の存在が他人から認められたい、という社会的承認 (recognition) の欲求の5つを挙げている。
- 4) 筆者は、人間は岡村の挙げる5つの心理的欲求が充足されると、自己を他者へと投影し、この「他者充実の欲求」を生起させると考えている。
- 5) 前掲書1) P.382。
- 6) 山根常男『家族と社会 ー社会生態学の理論を旨としてー』家政教育社 1998年 P.165。
- 7) 前掲書6) P.162。
- 8) 斎藤學『家族依存症 ー仕事中毒から過食までー』誠信書房 1989年 P.158。
- 9) 『誠信 心理学辞典』誠信書房 1981年 「基本的信頼対基本的不信」の項を参照。
- 10) 前掲書6) P.163。
- 11) 前掲書6) P.161。
- 12) 前掲書6) P.163。
- 13) 前掲書6) P.163。
- 14) 前掲書6) P.163。
- 15) 前掲書6) P.163。
- 16) 前掲書6) P.164。
- 17) 斎藤學『嗜癖行動と家族 ー過食症 アルコール依存症からの回復ー』有斐閣 1984年 P.102。
- 18) 阿部志郎は、高齢者の「より大きな不安は、孤独と死」であり、「両者は不可分に結びついている」ことを指摘した上で、「自分のなかに他人が存在しない。だから孤独に見舞われる」と述べている(阿部志郎『福祉の哲学』誠信書房 2000年 P.64)。そこから筆者は、“自己の存在価値の証しとなる人物”を指して「心のなかの他者」と言うことにしている。
- 19) 鯨岡は、『いつも、すでに』相手に向けられていた当事主体の関心が、いまこの瞬間に相手の身体へと引き寄せられ、『そこ』に凝縮されたときに、『ここ』において『そこ』を生きるという不思議な魔術の変身が当事主体に生じることを一語で言い表したものである、また「共感性に関し

て常識的に言われる『人の身になって考える』『相手の立場に立ってみる』ということと、われわれのいう『成り込み』とは、前者のもっている意識的、認知的な側面を脱色すれば、ほとんど重なるといってもよからう」と、「成り込み」を説明している（鯨岡峻『関係発達論の構築 問主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房 2004年 P.P.134～135）。「成り込み」は、“ただ可愛いから愛する”という母親つまり鯨岡のいう「当事主体」の乳児に対する関心の向け方を基盤としていることになる。

